

軍人としての内部矛盾

仲條立一

石原莞爾の伝記を探ってみる時、満州建国と石原莞爾、二・二六事件と石原莞爾という興味ある歴史に衝き当たります。これらの時、石原莞爾は軍の理想に燃える軍人であった。理想と現実の日本及び日本陸軍とがどう対立したか、というところから石原莞爾を考えることも必要である。俺は石原莞爾についての著作を読んでもっとも感動した事は、軍人石原莞爾がヒューマニズムの人であるということだ。

戦時下にある記者との対談で、こと言論の取締りの行過ぎについて、「大体『赤』なんて簡単にいってのけることのできるものではない。『赤』とは反対国であるということだ。国体に対する反逆者・・・

「日本人にとっては致命的な言葉だ」と語っているところに、それを見たつもりだ。

「国体も理想も反抗するものがなくては強力にならない」という自由主義な発想です。

だから占領軍アメリカによるデモクラシー政策には同意しないとの意見を、見せていたのです。民衆の立場から見る場合、石原莞爾の主張と批判とは、政治や政治家に対しても、軍人軍閥に対する場合も、歯切れがよく、理解しやすいという特徴がある。

後に東亜連盟（現、石原莞爾平和思想研究）の運動においても、現実的で解りやすいということは石原莞爾がすぐれた特色であり、遠い未来の問題についても、現実の戦時国家の実状について語る場合も、まことに具体的に解説しながら、所見を述べるという態度には見事なものでありました。

太平洋戦争で、記者などと語ったものが今に残っているのですが、それを見ても、当時威勢を誇った東条陸軍に対して、語る機会あれば所信を明らかにしている。

「軍人が政治に関係すれば外からは軍人の信義を疑われ、内部においては軍の不統一を来たすおそれが多分にある。それでいろいろの法律にも、軍人の政治干与を禁止している。軍人は政治をやれない組織になっている。」石原莞爾のこの考えは東条英機と真っ向から対立した。それはまず満州国に対するものとして現れ、日本の将来について、日華平和について、その対立は激しかった。

関東軍参謀長東条英機の施策と石原副長の考え方にはかなりの溝があった。

石原將軍によれば、満州国を独立国として真の民族協和による王道楽土の理想国家の建設を目指しているが、

東条参謀長は、日本政権獲得と自己軍閥の勢力拡張の意図を多分に含んでいる。

石原将軍は、関東軍は満州国育成の内面指導権を持っているので、これが軍閥の根拠地となり、軍閥とこれに結託する日系官僚群の専制政治化する危惧があったので、満州国育成の内面指導の撤廃を主張し・・・」とその対立の激しさを語っている。